第1部　各地域における東日本大震災

A　田老地域

第5章　地域のために（赤沼正清さんと東日本大震災）

神田より子

はじめに

２０１２年８月12日以降継続的に話を伺った。前の章で田老地区での支援態勢について赤沼さんの語りを述べてきたが、震災以前も以降も赤沼さんの田老での活躍ぶりには目を見張るものがある。以下では赤沼さんに語っていただいた人生史を通して、田老という地域を描き出してみたい。

赤沼正清さん（昭和15年生）は田老町役場に勤務の後、平成18年４月１日に財団法人グリーンピア田老の専務理事に就任し、３・11当日もその立場から震災に対処してきた。当時は田老漁協監事、社会福祉協議会副会長、道の駅監査役、乙部自治会長（これは被災後、平成23年６月に解散）などもやっていた。また今は、宮古市社会福祉協議会会長の立場にあり、相変わらず忙しい毎日を送っている。

写真１　赤沼正清さん

１　仮設の生活と自治会について

田老の海岸近くは乙部２、観光ホテルから北側は乙部１という区割りで、私は乙部１の自治会長だった。退職前は副会長だったが、平成12年12月31日に役場を退職してから会長になった。乙部１地区は86世帯中22世帯の28人が亡くなったので、信用金庫に預けた自治会の金を、弔慰金として差し上げた。乙部２地区も同数くらいの方々が亡くなっている。１世帯で４人亡くなった家もある。世帯数は乙部１も２も86～87戸あり、仮設に入居したあと、被災自治会は解散した。震災前に乙部に住んでいた86世帯の内、半分は田老を離れた。

私が住んでいる「グリーンピアテニスコート仮設」には乙部、青砂里、荒谷（ありや）など12の自治会の人々が入居している。仮設住宅の場所を選ぶ際に、田老では抽選ではなく、コミュニティを対象にした。宮古勤務の人は西ヶ丘や、ドラ方面に行きたいと希望した人もいた。乙部自治会の人もあちこちの仮設に入った。

テニスコート仮設内での自治会結成については、以前から気になっていたことの一つだった。自治会を立ち上げてほしいとの声は、子供を持った父兄からも出てきた。小学生がバスで通学するのに、バス停まで３００㍍の距離の雪かきが大変で、除雪機がほしいと希望が出た。支援団体から除雪機を寄附してもらうためにも、自治会といったような団体を作る必要があったので、立ち上げた。

除雪機をグラウンド仮設の人にも貸してあげるため、話し合いをした。すると社会福祉協議会の会長として、グラウンド仮設の自治会の立ち上げも応援してほしいと言われた。グラウンド仮設は４つの行政区に分かれているが、自治会がまだできていない。

テニスコート仮設へは当初１２２世帯が入居したが、今は92世帯が残っている。早い人は震災の年に仮設を出たが平成24年、25年に多くが去った。平成25年12月で30世帯減った。仮設の部屋が空いたので、世帯分離をして子供部屋にした家もある。

新しい居住地について（震災公営住宅など）

田老の人は乙部高台と田老総合事務所のどちらの公営住宅も選べる。崎山地区では社協が支援員を派遣して、仲間作りの場所を提供したり、自治会に入るよう指導している。

乙部１からは崎山に移った人が最も多い。被災者だからと、格安で土地が買えたところもあったようだ。宮古に住むつもりで土地を買ったが、乙部高台にも土地をほしいという人もいる。

私は乙部の高台に家を建てる予定にしている。災害危険区域に指定された場所に家があった場合は、その土地は市で買い取ってくれる。倉庫や貸した建物は市では買わないし、農地も買わない。流された私の家の場所は50㌢嵩上げすれば家を建ててもよいこととなった。私の家があった土地は売らずに残しておく予定だ。近所の人たちが田老を出てゆくと言っているので当初我が家も、出ようか、という話が出たが、私は頑として「出ない」と言っているので、今はそういう話はしていない。

仮設に住んでいる人たちは、住宅展示会があると皆見に行く。高台の土地の造成は平成27年9月に完成し、災害公営住宅は平成27年12月から入居できる予定だ。役場の前にも公営住宅が建つ予定で今建設中だ。

青砂里あたりは漁師が多いので、一度宮古に出た人もいるが漁業権を持っているので、また戻ってくる人もいる。

高台の土地の価格説明はあった。ただ、誰がどこに行くのかは、未定のままだ。

2　経歴

私は昭和35年から田老町役場に入り産業土木課をスタートに3年間所属し、その後建設課に7年、産業観光課に7年いた。昭和54年から平成3年までの13年間は国保田老病院にいたが、当時は経営難に加え薬剤師や看護師が足りず苦労をした。平成4年から6年まで社会教育課、平成7年～8年は産業観光課、9年から10年は建設課長、11年から12年は税務財政課長をつとめ、12月に退職した。当時の田老町役場では厳しい財政事情があったので、21世紀は若い人に任せるべきとの想いで、年度末の3月を待たずに退職した。この年は、私より若い人も含めて5人が退職をしたので、若い人たちに道を譲りたいという想いは果たせたかと思う。

役場の災害対策と計画

役場在職時には、第一警戒は課長以上、第二警戒は全職員が出所と災害計画で決まっていた。津波の避難訓練、誘導などは常にやっていた。退職後に勤めたグリーンピアでは火災などの初期消火訓練はやっていたが、被災者を受け入れる訓練はやっていなかった。さらに行政関係者は自分1人だった。

田老町では、毎年3月3日に津波の避難訓練をやっていた。大きな地震があった翌年には参加者が多くなる。明治29年、昭和8年の津波の経験から地震を想定した訓練をやった。係長、課長になると、指揮をする立場で班編成の訓練もする。今回の震災を受けて、訓練は大切だと再認識し、何かあれば高台に行くことを痛感した。田老小学校の頃は、先生に連れられて避難訓練をしたものだ。

昭和35年、役場に入った年にチリ地震津波があり、長時間の待機時間があった。このチリ地震津波を経て、防潮堤が二重になった。職場に入ると明治29年と昭和8年の津波の話は常に聞かされていた。昭和45年の十勝沖地震では、上司の命令で潮位を測るため海岸まで行き、海の水が引いていくのを見た。十勝沖地震の場合、堤防があって助かったというが、そんなに大きな波ではなかった。宮城県沖の地震があると、南東から津波が来るので危ないといわれていた。

田老町のような小さい町村レベルでは、1つの分野を深くきわめることはできないが、広く色々な仕事を経験できるし、1人で何役もやる必要がある。役場に入りたての頃は、三陸フェーン災害も経験した。

『足跡』

平成元年頃から、公民館の事業で『足跡』という思い出文集を作り始め、10数年続いた。この中には津波の伝聞を特集したものもある。生涯学習の一環として『津波伝聞誌』（平成2、3年頃）も作られた。この当時、教育長なども務めた田澤直志さんが中心となり続いた事業だった。田澤さんは、昭和8年の津波経験者であり田老町史編纂にも携わった方だ。

社会福祉協議会

平成13年5月から17年10月まで田老町社会福祉協議会会長をつとめた。17年6月に宮古市と合併し、17年11月1日からは、宮古市社会福祉協議会副会長をつとめることとなった。その傍ら、平成18年4月から24年5月23日まで㈶グリーンピア田老の専務理事もつとめた。

消防団員

役場在職中、消防団の皆さんには地域に対してたくさん協力してもらっていた。そのため、自分が退職したら消防団員として地域の手伝いをしようと思い入団した。今までとは違う業種の方との関わりにも興味があった。三分団に所属して、最下級の立場で集会にはお茶汲みや小昼の手伝いをした。事務的なことを手伝うと言って会計などをしたが、分団長の話し相手もやった。星が1つの下っ端の私に分団長が頭を下げるので、「あの人はだれだべぇ」と言っている人もあった。

3　家のこと、兄弟のこと

実家でのこと

兄弟が6人いるが皆、被災した。私は戸籍上では四男だが、上の2人が幼くして亡くなっており、2番目の男になる。長女は昭和11年生まれで、田老の仮設に住んでいる。昭和10年生まれと13年生まれの2人が幼い時亡くなった。すぐ上の兄は14年生まれだ。下には17年生まれの妹と20年生まれの弟、22年生まれの妹がいる。

実家は、「まつばや」という餅屋で、両親は豚を飼って粉ひきをやっていた。父は身体が弱く、65歳で亡くなった。

十和田での生活

中学3年の時、十和田市（当時は三本木市）の中学校に転校した。家庭が貧しく、高校に行けないため、母の姉が十和田で食糧・酒・味噌などの卸問屋をやっており、そこで丁稚奉公をしながら高校へ通った。中3の1月に十和田に移り、三本木農業高校の商学科に入った。馬橇に乗って配達したりの仕事をして、高校卒業までも含めて4年間そこにいた。

卒業して1年後に、田老で役場の採用試験があると母が聞いてきて、それで戻った。十和田では「信用は無限の資本だ」と教えられた。頭の下げ方が悪いなども教えられた。十和田の叔母には子がなく、正清さんを養子にしたいと迎えにきたが、逃げ出した。

野球は田老第一中学校でピッチャーとサードをやっていた。十和田での高校時代は、昼休みにサッカーをやっていたが、学校が終わると配達があるのでスポーツはできなかった。叔母の家では8人くらいが住み込みで働き、6人が同室で、うち1人は叔母の夫の親戚の子だった。

この当時の十和田の中学校の同期会がある。私は中学3年の1月に転校してきたので1か月きりしか在学していなかったが、今回の震災の時に彼らは義援金をくれた。こうした縁もあって、今でも都合をつけて参加している。

地域とのかかわり

子供たちが小学校、中学校のころは、ＰＴＡ会長や小学校サッカー少年団の指導員をしていた。小学校のサッカー愛好会からクラブに育つ頃のことで、今彼らは50代になり子供たちを指導している。その後、中学校の女子ソフトボールのコーチを頼まれ、指導した。県大会にも出場した彼女たちも今では40代で、町で会っても「正清さん！」と声をかけられる。障がい者の子も公平に扱って、一緒に練習させた。最初の顧問は女の先生だったが、ソフトボールの経験がなかった。2年目からはスキーで国体に出たことのある先生が顧問になり、その先生のやり方をバックアップする形で一緒に指導した。依頼されると、とりあえずやる。断ったことはない。

地域で集まりやお祭りがあると、踊ったり跳ねたりする。皆で踊りを前もって練習して出るので、そのことは忘れられない思い出だ。

自治会

平成3、4年頃、地域の自治会が組織され、乙部地区の事務局をやっていた。乙部は世帯数が増えて、1と2に分離した。平成2、3年頃のこと。防潮堤が前方にできたので、若い世帯が家を建て始め、80世帯位に増えたためだ。

若いころから自治会の仕事をしていたので、知らない人はいなかった。田老町民運動会、福祉演芸大会、祭りには必ず打ち合わせなどにも出ていて、皆、顔を知っていた。

家族のこと

妻は、田老町役場で働いていたので理解はあった。でも、彼女の意思に反して私が勝手に彼女を55歳で退職させてしまったので、その時のことは未だに怒っているようだ。

子供たちは、保育所に預けたり、今でいうベビーシッターのような人にお金を払って預けた。妻の実家も近くにあったので、そこにも預けた。皆に助けられながら成長したのだとよく言う。そのため、こちらでできることは恩返しをしたいという気持ちでいる。自分自身、苦しい時に叔父や叔母がいて高校に行かせてもらったという事が根底にある。

「お父さんが家に居た記憶がない」と子供には言われるが、その通りなので何も言えない。